

キャンプリーダーの不安について —障害児ディ・キャンプにおける初参加リーダーの場合—

○高橋 伸
(国際基督教大学)

I. 研究動機及び目的

組織キャンプにおいて、子供と直接かかわるリーダーの態度や行動が、メンバーに大きく影響を与え、そのキャンプの成果を左右する事実については、多くのキャンプ指導者が知っているところである。^{1) 2)}

東京YWCA 国領センター主催の「障害児ディ・キャンプ」(1981年より、毎年8月中旬に実施)には、毎年多くのボランティア・リーダーが参加する。このうち約半数が、障害児と共に過すことや、組織キャンプに参加することが初めての者である。

1981年の当キャンプの開始より、プログラム・ディレクターとして参加してきたが、キャンプ開始当初は、本人を含め、リーダー達が、キャンパー(障害児)(以下、障害児省略)、への働きかけや、キャンプ運営に、戸惑いやぎこちなさが目立った。このことから、まずリーダー達が感じている不安を明らかにして、事前にこれを和らげておくことは、より円滑で、実り多いキャンプ実施への良策と考えた。平野らの研究³⁾では、健全児対象のキャンプではあるが、事前のトレーニング効果の有効性も報告されている。

不安の研究においては、Taylor(1953)による顕在性不安尺度-Manifest Anxiety Scale(MAS)-や、Spilberger(1970)による状態不安測定のためのState-Traits Anxiety Inventory (STAI)などの質問紙を用いたものがある。

キャンプにおける不安については、キャンパーを対象として調査した野沢⁴⁾、川村⁵⁾、井村⁶⁾らの研究がある。又キャンパーの母親に対して行った飯田⁷⁾らのものが発表されている。プログラムと不安については、星野ら⁸⁾、カウンセリング・リーダーの経験と不安については、平野⁹⁾のものが報告されている。

心理学の分野では、不安が学習・作業に及ぼす影響を調べたものが報告されているが、状況・パーソナリティ・実験方法などによって、異なった結果を示し、不安と行動の係わりを調べることの困難さを指摘している。

本研究は、不安の変化や相関を明らかにしようとするものではない。キャンプ・リーダーのもっている具体的な不安を知ろうとするものである。対象のボランティア・リーダーは、本人の意志で参加した者であることを考慮にいれば、彼等のもつ不安を取り除くことは、本人の行動、ひいてはキャンプ全体の運営にプラスになるものと考ええる。

今回は、自由記述によるアンケート結果から、具体的な一般不安項目を知るとともに、その傾向の分析を直接の目的としている。

II. 調査対象キャンプの概要

1. 組織・構成・プログラム

本調査を行った母体となる障害児ディ・キャンプは、東京都調布市にある東京YWCA 国領センター主催による近隣地域在住の障害児を対象としたものである。

本キャンプの主な目的は療育とはしていない。むしろ学校・家庭での教育訓練の補完的役割を重視しているといえよう。それ故、事前においては、学校訪問、家庭訪問などを通して、担任教員や父兄との連絡を十分とるようにしている。

スタッフの構成は、マネージメント・ディレクター、カウンセリング・ディレクター、プログラム・ディレクター各1名のほか、プログラム・リーダー数名(経験者)とメンバー1名にそれぞれ担当のカウンセリング・リーダーがつくようになっている。

また、プログラムは、同センター敷地内を中心に、歌、シンキングゲーム、運動会、水遊び、飲食物、クラフト等を、午前9時より午後3時まで実施している。尚、最終日には、午後4時より、家族や兄弟を招いての祭とキャンプファイヤーを催している。

2. キャンパー(障害児)

キャンパーは、近隣在住の養護学校や特殊学級に通学する小中学生、男女20~30名である。知恵遅れ、自閉性障害、ダウン症などの障害を有する者で、数名は体力的に劣る者、歩行障害のある者がいるが、殆どは身体的に問題のない者である。

3. 指導者

ボランティア・リーダーの募集は、調布市公報、近隣の大学、福祉・保育科を有する専門学校、短大、東京YWCA ボランティア・ビューローやYWCA 会員、リーダーの個人的紹介などを通じて行われている。毎年延べ30~40名が応募し参加する。それらのうち約3分の2が女性である。

準備のための会合、リーダー・トレーニングは、3カ月前より実施し、事前の具体的準備、チームづくり、運営担当などを決めていく。

III. 調査方法と分析の方法

1. 調査対象

1982・'83・'85年に、本キャンプへ初参加したボランティア・リーダー、男性6名、女性25名、計31名を調査対象とした。これらの者は、いずれも組織キャンプ、障害児プログラム未経験者である。

24才男性を除き、すべて大学生年齢で、その平均年齢

は 19.3 才である。そのうち1/3が、18、19才の女性である。男女比は1対4となっている(表1)。また、専門課程専攻学生が多く、福祉専攻約40%、教育・保育専攻約20%で、全体の約60%を占めている(表2)。

2. 調査の方法

毎年6月に行なわれるオリエンテーションをかねた全体リーダー会の際、各自に記入用紙を配布し、実施後すぐ回収した。

記入の指示は、「本キャンプに参加するにあたって、不安に思う事項を、なるべく具体的に箇条書きで列挙してください。そして、各不安項目について、その度合を5段階スケールに(5が最も強い)あてはめてください」とした。

とくに制限時間は設けなかったが、約10分で書きあげた者が多かった。

表 1 年齢構成

年度	年齢	18	19	20	21	22	23～	小計	計
'82	男	-	-	-	-	1	-	1	11
	女	3	4	1	2	-	-	10	
'83	男	-	-	-	-	-	1	1	8
	女	1	2	3	1	-	-	7	
'85	男	-	2	1	1	-	-	4	12
	女	6	2	-	-	-	-	8	
小計	男	0	2	1	1	1	1	6	19.4%
	女	10	8	4	3	0	0	25	
計		10	10	5	4	1	1	合計	31名

平均年齢19.3才

表 2 専門課程専攻学生数

年度	専攻	福祉	教育・保育	小計	計
'82	男	0	0	0	7名
	女	4	3	7	
'83	男	0	0	0	6名
	女	5	1	6	
'85	男	0	2	2	10名
	女	8	0	8	
小計	男	0	2	2	21名
	女	17	4	21	
計		17名 (54.8%)	6名 (19.4%)	23名 (71.2%)	

* ()内は全員に対する割合

3. 分析の方法

箇条書きされた全項目をカード化し、次の項目を分析した。

- 1) 一般不安項目の検討
- 2) 不安項目とその度合の検討
- 3) 一般不安項目の所持率の検討

IV. 結果の考察

1. 一般不安項目の検討

被験者31名の平均箇条項目数は3～4個、'82,'83,'85年と年を追う毎に減少している(表3)。不安度数の平均値は、ほぼ4でかなり強い不安を示していると思われる。

表 3 平均箇条項目数及び平均不安度合

年 度	人 数	平均項目数	平均不安度合
'82	11	4.27	4.13
'83	8	3.50	3.71
'85	12	3.17	4.11
計	31	3.65	4.02

全113項の箇条項目を、同類別に分類すると29項(その他を含む)にまとめられた(表4)。箇条項目の多いものとしては、「1) 子供と接するのが初めてなので(9項)」、「2) 子供(障害児)とどうやって接すればよいか(8項)」、「23) キャンプ経験がなくてわからない(9項)」、といった「初参加」のための不安項目があげられる。次に多いものは、「3) 子供(障害児)と仲よくできるか(6項)」、「4) 子供(障害児)に嫌われたらどうしよう(6項)」、といった、自分を容認してくれるだろうかというような子供の反応に対する不安と、「22) 事前の打ち合せ、プログラムにあまり参加できない(6項)」、がある。言い換えれば、責任の遂行や内容の理解方法が持てないことに対する不安と言えるのではないか。

前者の1)、2)、23)の合計は、総数の23%、次の3)、4)、22)では15.9%。6項目を合せると全体の38.9%、約4割を占めている。これらから、キャンプ時に「どうしたらよいか、何をしたらよいか」という、実際の方法や態度についての不安が多いことが窮える。

分類した28項目を傾向別(別)に大別すると(表5)、「A: 子供(障害児)に対しての不安」、「B: 自分自身に対しての不安」、「C: キャンプ・プログラムに対しての不安」の3つに、また、それぞれの中で2つないし3つに分けることができた。

表 4 不安項目の分類

A: 子供(障害児)に対しての不安

不安項目	箇条項目数	平均不安度合
[1] 子供(障害児)に対しての不安	47	4.17
1) 子供(障害児)と接するのが初めて	9	4.00
2) 子供(")とどうやって接すればよいか	8	4.50
3) 子供(")と仲よくできるか	6	4.00
4) 子供(")に嫌われたらどうしよう	6	4.33
5) どの程度介助したらよいか	5	3.60
6) 子供(")のこぼや気がわかるか	5	3.80
7) 子供(")の面倒をきちんと見られるか	4	4.50

8) 子供()とうまく話ができるか	3	5.00
9) その他	1	4.00
[2] 障害児に対する知識	8	3.88
10) 障害の程度がわからない	3	3.67
11) 障害についての知識がない	3	4.33
12) その他	2	3.50
[3] 状況への対処	7	4.57
13) もし発作をおこしたら	3	4.67
14) わがままな行動をした場合	2	5.00
15) その他	2	4.00

B：自分自身に対する不安

[1] 性格・態度について	20	3.60
16) 自分の性格・態度が悪い影響を与えないか	4	3.75
17) 体力がつづくか	3	4.00
18) 最後までやり通せるか	3	3.67
19) やってゆけるだろうか	3	4.00
20) きちっとした態度をとりつづけられるか	3	3.33
21) その他	4	3.00
[2] スケジュールについて	6	3.67
22) 事前の打ち合せ・プログラムにあまり参加できない	6	3.67
[3] リーダーとのコミュニケーション	5	2.40
23) 他のリーダーとうまくやってゆけるか	3	2.00
24) グループの話し合いに入ってゆけるか	2	3.00

C：キャンプ・プログラムに対する不安

[1] 経験について	9	4.56
25) キャンプ経験がなくてわからない	9	4.56
[2] 内容について	8	4.38
26) リーダーの役割・仕事がわからない	3	4.33
27) キャンプで何をするのか	2	4.50
28) その他	2	4.40

D：その他

[1] その他	3	
---------	---	--

表 5 分類項目の傾向

分類項目	簡条項目数	全体の割合
A：子供(障害児)に対する不安	62	54.9%
内		
[1] 接し方について	47	41.6%
[2] 障害児に対する知識	8	7.1%
[3] 状況への対処	7	6.2%
訳		

B：自分自身に対する不安	31	27.4%
内		
[1] 性格・態度について	20	17.7%
[2] スケジュールについて	6	5.6%
[3] リーダーとのコミュニケーション	5	4.4%
C：キャンプ・プログラムに対して	17	15.0%
内		
[1] 経験について	9	8.0%
[2] 内容について	8	7.1%
D：その他	3	2.7%

「A：子供(障害児)に対する不安」、は全簡条項目数の半数以上の54.9%を占めている。内訳としては、「[1] 接し方について」、「[2] 障害児に対する知識」、「[3] 状況への対処」、に分けられたが、「[1] 接し方について」、がほとんどで、全体の割合を見ても41.6%と4割を占めている。不適応行動や、発作などの場面に対する「[3] 状況への対処」、が1割にも満たないことは、「[1] 接しかたについて」、を初歩的方法的段階の不安とすれば、実際場面でのイメージがつかめていないことを示していると見定められるのではないだろうか。

「B：自分自身に対する不安」、は全体の27.4%と3割弱。内訳は「[1] 性格・態度について」、「[2] スケジュールについて」、「[3] リーダーとのコミュニケーション」、に分けられた。これらは自分自身に対する自信のなさの表われではないだろうか。子供に対して「悪い影響を与えないか」、体力的・精神的に「やり通せるか」といった「[1] 性格・態度について」、の不安だけでも全体の2割近くある。

「C：キャンプ・プログラムについて」、が15.0%と少ないのは、障害児に対する興味を中心であることを示しているのであろう。

これらを総合すると以下のような文章に要約されるのではないだろうか。

障害児ディキャンプ参加にあたって、「障害児と接したことがないので、どうやって接すればよいのだろうか、キャンプの経験もないし、自分の性格を思うと、最後まできちっとやり通せるだろうか。」

表 6 不安度合による分類(簡条項目数)

分類項目	不安度合	5度	4度	3度	2度	1度	平均不安度合
		度	度	度	度	度	
A：子供に対する不安	(1)接し方について	21	13	13	-	-	4.17
	(2)障害児に対する知識	2	3	3	-	-	3.88
	(3)状況への対処	5	1	1	-	-	4.57
		28	17	17	0	0	4.17

B: 自分自身に対する不安	(1)性格・態度について	6	4	7	2	1	3.60
	(2)スケジュール	1	2	3	-	-	3.67
	(3)リーダーとのコミュニケ.	-	1	2	1	1	2.60
		7	7	12	3	2	3.45
C: キャンプ・プログラ	(1)経験について	6	2	1	-	-	4.56
	(2)内容について	3	5	-	-	-	4.38
		9	7	1	0	0	4.47
D: その他		2	-	1	-	-	4.33
総平均							4.02

2. 一般不安項目とその不安度合による検討

5段階スケールによる不安度合の平均を上回っているものとしては、「A: [1] 接し方について(4.17)」、「A: [2] 状況への対処(4.57)」、「C: [1] 経験(4.56)」、「C: [2] 内容(4.38)」と「A: 子供に対しての不安」、「C: キャンプ・プログラムに対しての不安」のものが多く、未経験の事柄に対して高く、「B: 自分自身に対しての不安」、は不安度数3.45と、前者よりも約1度低い値を示している。これは、自分自身に対して自信がないものの、彼等は自発的に参加したボランティアであること、専門課程専攻の学生が多い事が関わっていると思われる。

3. 一般不安項目の所持率による検討

まず、大まかに見ると、「A: 子供に対しての不安」、は実に10人中9人が持っていることになる。この中でも「A: [1] 接し方について」、は10人中8人とほとんどの者が感じている。「B: 自分自身に対しての不安」、は10人中6人、そして、「B: [1] 性格・態度について」、の不安を半数近くの者が持っていることになる。

子供に対する具体的な接し方がわからず、自分の性格や態度に対する自信のなさが、本キャンプ初参加リーダーの特徴と見なすことができるのではないだろうか。

表 7 項目・年度別、所持率

分類項目	年度	'82				'83				計	率
		1	2	3	4	1	2	3	4		
A: 子供(障害児)に対する不安	(1)接し方について	11	3	11	25	80.6%	90.0%				
	(2)障害児に対する知識	1	4	3	8	25.8%					
	(3)状況への対処	2	0	2	4	12.9%					
B: 自分自身に対する不安	(1)性格・態度について	6	3	5	14	45.2%	61.3%				
	(2)スケジュール	0	4	1	5	16.1%					
	(3)リーダーとのコミュニケ.	1	3	1	5	16.1%					
C: キャンプ・プログラ	(1)経験について	3	2	2	7	22.6%	30.2%				
	(2)内容について	2	1	0	3	9.7%					

年度別に見ると、'82年、'85年がほぼ同じような傾向で、'83年は全体的に分散している。'83年においては他との異なる状況は見当たらないので、リーダーの意識とパーソナリティの傾向によるものであろう。3年間の資料だけで

は不明確ではあるが、毎年同じような傾向を示さないと見てよいだろう。

V. まとめと今後の課題

本研究においては、経験のないリーダーが障害児キャンプに参加するに当って、どのような不安を持っているか多少なりとも明らかになった。

ほとんどのリーダーは、直接子供(障害児)と接する際の方法についての不安を比較的強く持っており、そのすべを知らない者が多い。半数以上の者は自分の性格、態度に不安をもち、自信のなさが感じられる。しかし、自由意志で参加したボランティアという性格から見て、興味ある未知の体験に対して、前向きな姿勢の表われと見て良いのではないだろうか。

専門課程専攻の学生が多かったが、松原・堅田らの報告¹⁰⁾によれば、特殊教育専攻の学生にしても、入学前に障害児と直接に接触をもっていったものは少なく、また、3・4年の実習等で障害児との接触が、意識の変化のきっかけになっていることが多いという結果がでている。本研究の結果をふまえ、今後の参考にしてゆきたい。

今後は、前述のキャンプにおける不安の結果をもふまえて、

1. キャンプ前後の不安の変化
2. 不安解消の原因と対策
3. 男女の差

について研究を続けたい。

1985年8月

[文献]

- 1) 松田 稔 『ザ・キャンプ—その理論と実際—』 P.77 創元社 1978年8月
- 2) 古閑慶之 『キャンプ—その理論と実際—』 P.49 ミネルヴァ書房
- 3) 平野吉直 「キャンプカウンセラーのトレーニング効果」 日本体育学会第33回大会 P.741 1982年8月
- 4) 野沢 巖・金子和正 「4泊5日の冬期野外活動における自己概念と不安の変化」 日本体育学会33回大会 P.735 1982年10月
- 5) 川村協平・橋 直隆・星野敏男・西田朋子・遠藤俊郎 「女子学生のキャンプにおける不安の変化について」 日本体育学会第33回大会 P.737 1982年10月
- 6) 井村 仁・飯田 稔 「Adventure Program 経験が参加者の不安に及ぼす影響— Adventure Program 不安検定検査作成の試み—」 日本体育学会第33回大会 P.738 1982年10月

- 7) 飯田 稔・近藤充夫・平野吉直 「キャンプ参加者の母親に関する研究—状態不安とキャンプ不安を中心に—」 日本体育学会第32回大会 P.684 1981年9月
- 8) 星野敏男・川村協平・橋 直隆 「女子学生のキャンプにおけるプログラムと不安について」 日本レクリエーション学会第12回大会 P.21 1982年10月
- 9) 平野吉直 「キャンプ・カウンセラーの不安に関する研究」 日本レクリエーション学会第11回大会 P.24 1981年11月
- 10) 松原達哉・堅田明義・松岡 武・三沢義一・中野善達・大井清吉 「特殊教育専攻学生の意識調査」 特殊教育研究第14巻第1号 P.22~38 1976年